

戸堂康之著
『開発経済学入門（第2版）』
新世社

第4章 貧困の罣

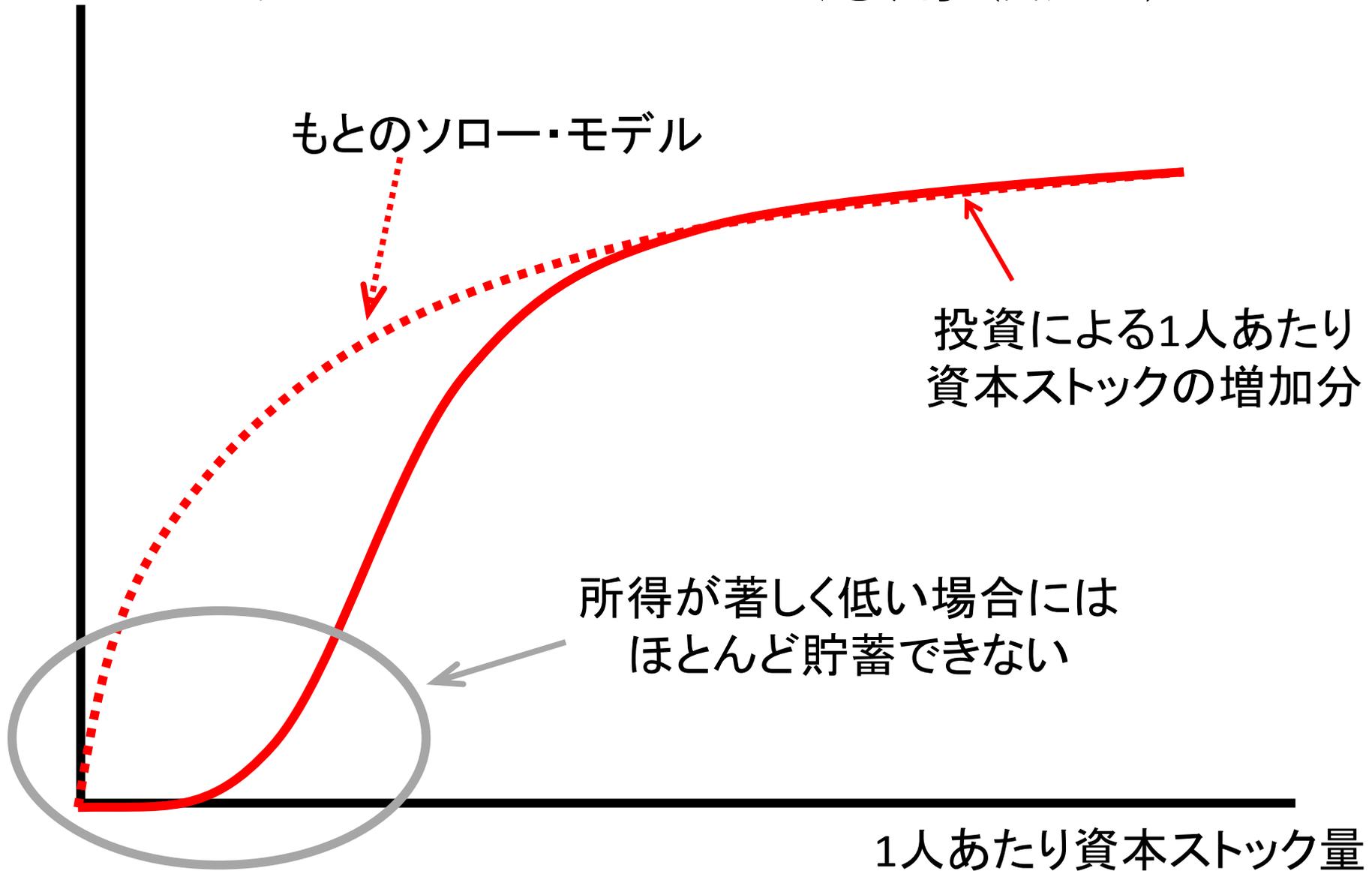


4.1 貧困の罫とは

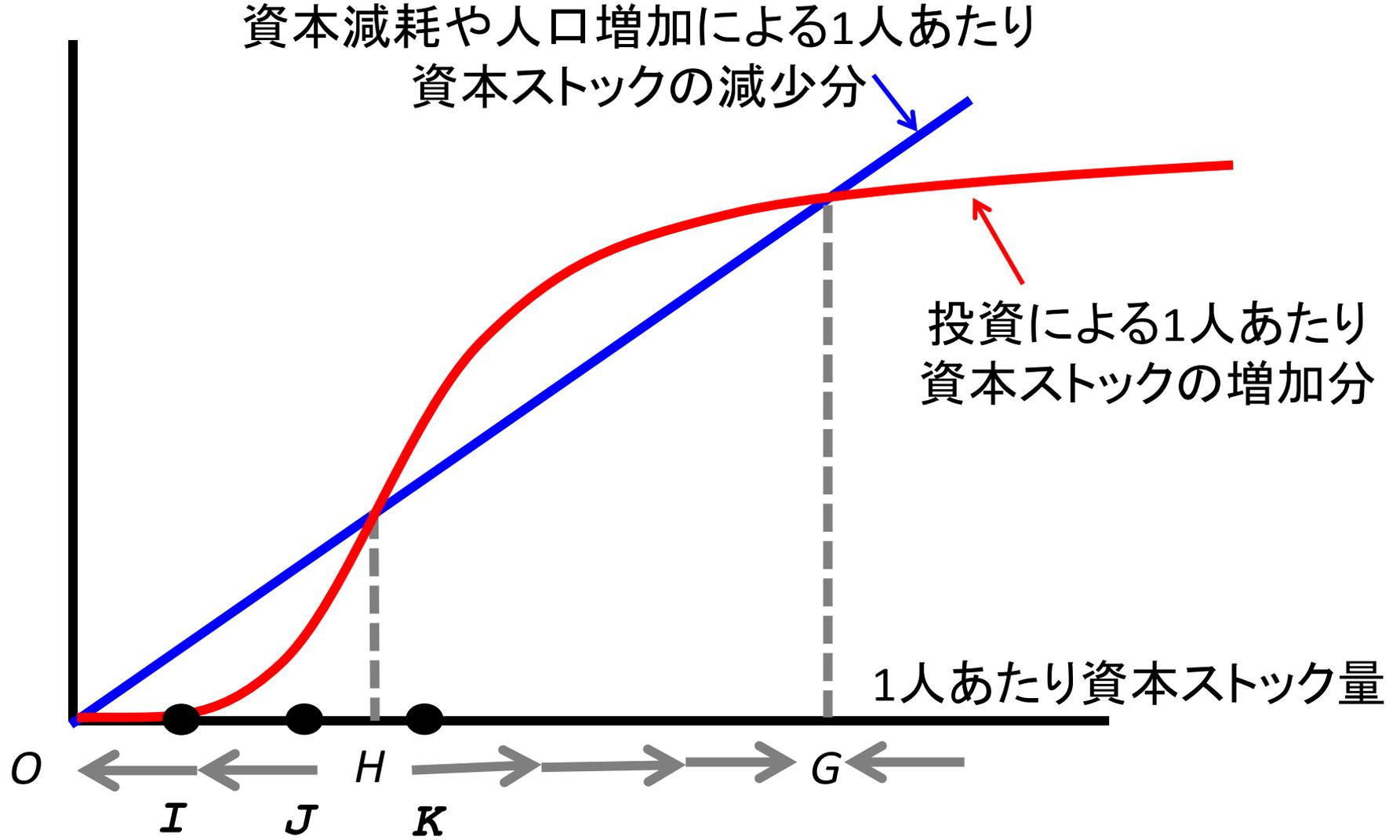
- ソロー・モデル、途上国を想定した内生成長モデルは条件付き収束を予測
(長期均衡から離れている国ほど成長率が高い)
- 現実には、サハラ以南アフリカの多くの国は、非常に貧しいにもかかわらず2000年ごろまで長期間経済が停滞 (第1章を参照)
- 貧困が貧困を呼ぶ「**貧困の罫**」が存在する可能性がある
 - ➔ 本当にあるのか？
あるならどうやって抜け出すのか？

4.2 貧困の罠の理論モデル (1)

ソロー・モデルの応用 (図表4-1)



「貧困の罠」のあるソローモデル (図表4-2)



J から出発 $\rightarrow O$ に収束 ; K から出発 $\rightarrow G$ に収束

「貧困の罠」のあるソローモデル

- 1人当たり資本ストックがあるレベル以下
(所得があるレベル以下)
 - ➔ 所得が低すぎて貯蓄できない
 - ➔ 資本蓄積が進まない
 - ➔ より貧困になっていく (貧困の罠)
- 1人当たり資本ストックがあるレベル以上
 - ➔ 成長 (ソローモデルと同じ理由)
- 初期条件によって、**2つの長期均衡**がある

4.3 貧困の罫の理論モデル (2)

2つの産業を仮定

• 近代産業

- 経験によって技術が進歩する
- 生産量が増えると、経験が蓄積され
労働の限界生産物（労働を1単位追加した時に
増える生産量 = 限界生産性）が増える
 - ➔ 規模に関して収穫逓増（規模の経済）

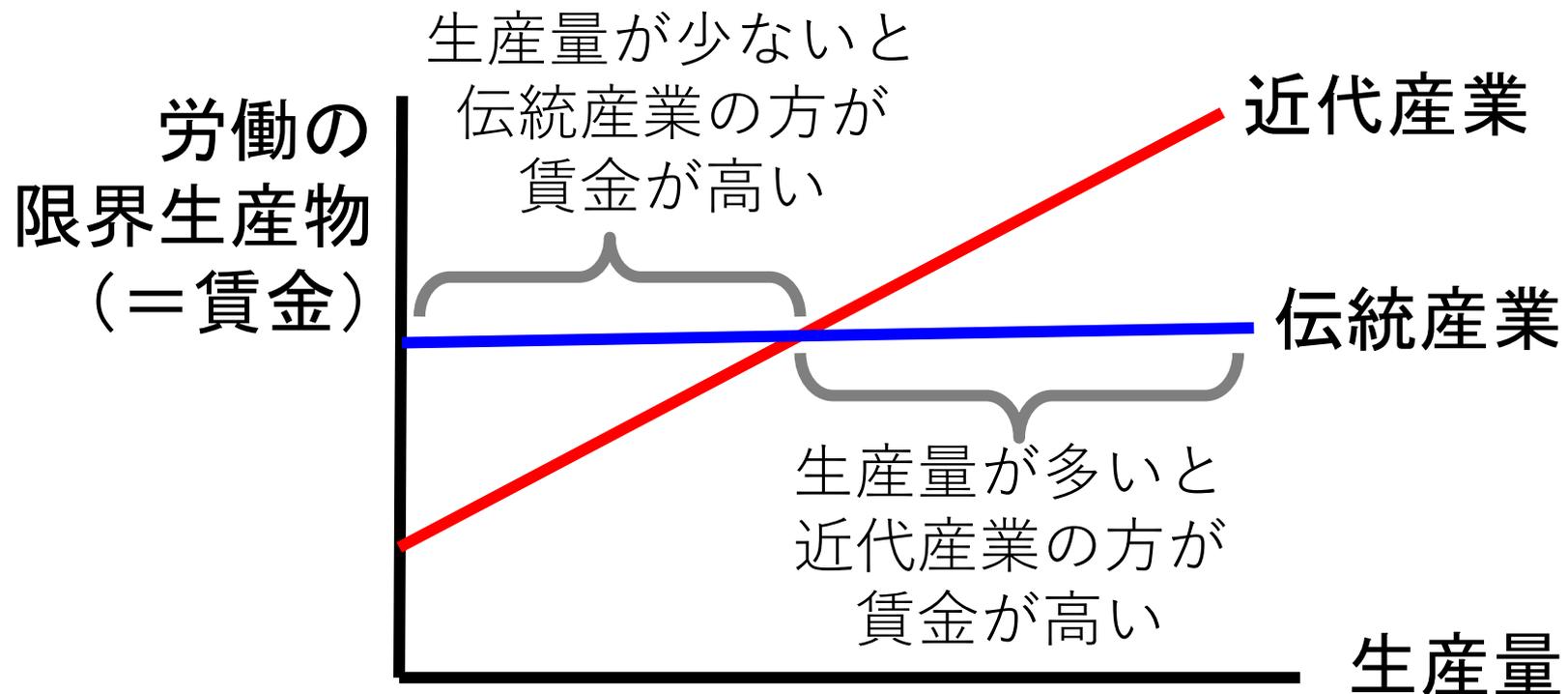
• 伝統産業

- 技術は進歩しない
 - ➔ 規模に関して収穫一定

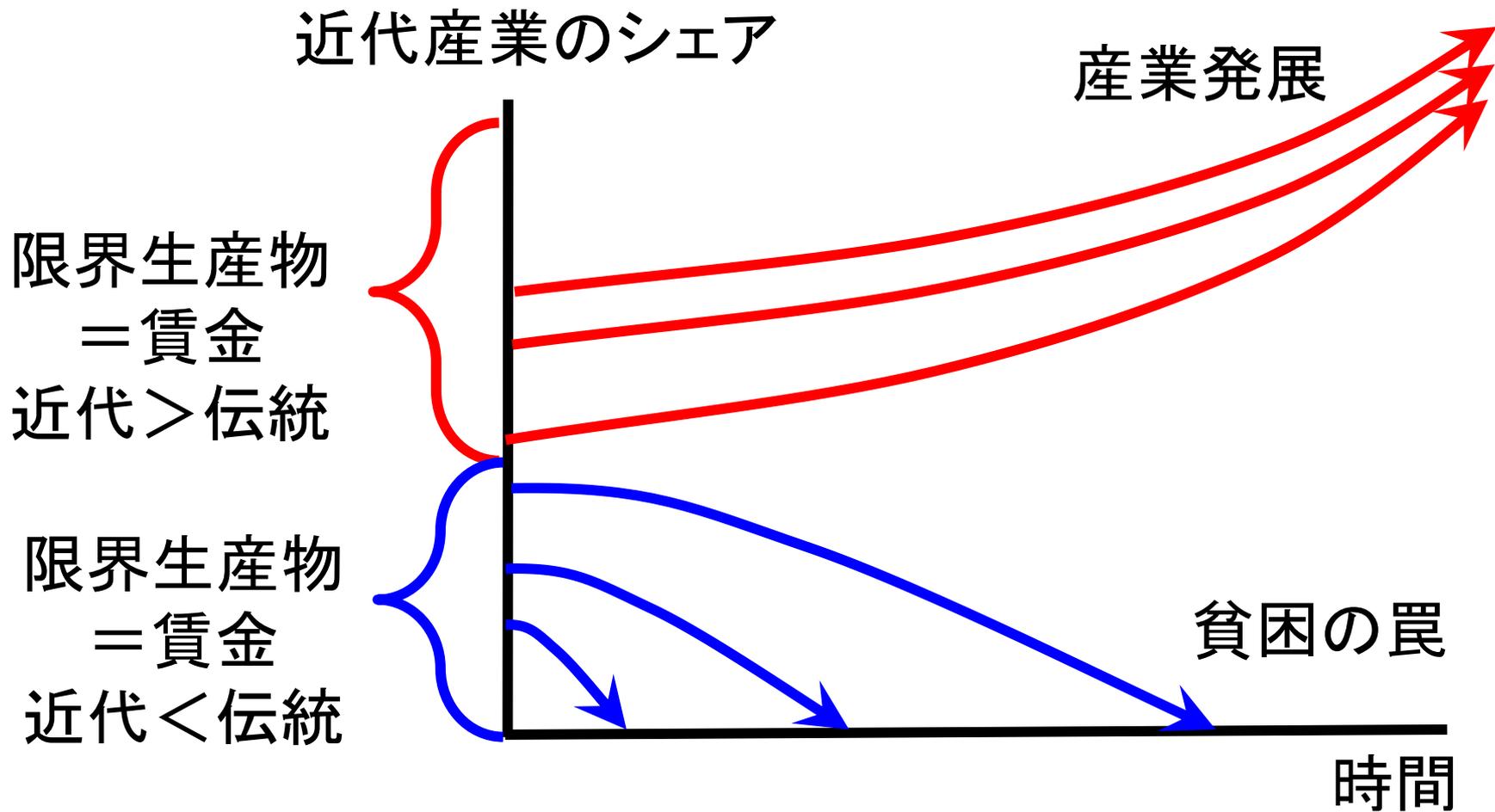
4.3 貧困の罫の理論モデル (2)

- 市場経済では、**労働の限界生産物 = 賃金**

図表4-3



2つの均衡 (図表4-4)



2つの均衡

初期条件に依存した **2つの成長経路**

- **初期に伝統産業中心** (貧困)
 - 近代産業は生産性低く、賃金低い
 - 近代産業衰退・伝統産業に依存
 - **貧困継続** (貧困の罫)
- **初期に近代産業が比較的大きい**
 - 近代産業は生産性高く、賃金高い
 - 近代産業に労働者が移動
 - 規模の経済によりますます近代産業の生産性が上がり、賃金が上がる
 - **近代中心の経済に** (産業発展)

4.4 経路依存性と成長期待

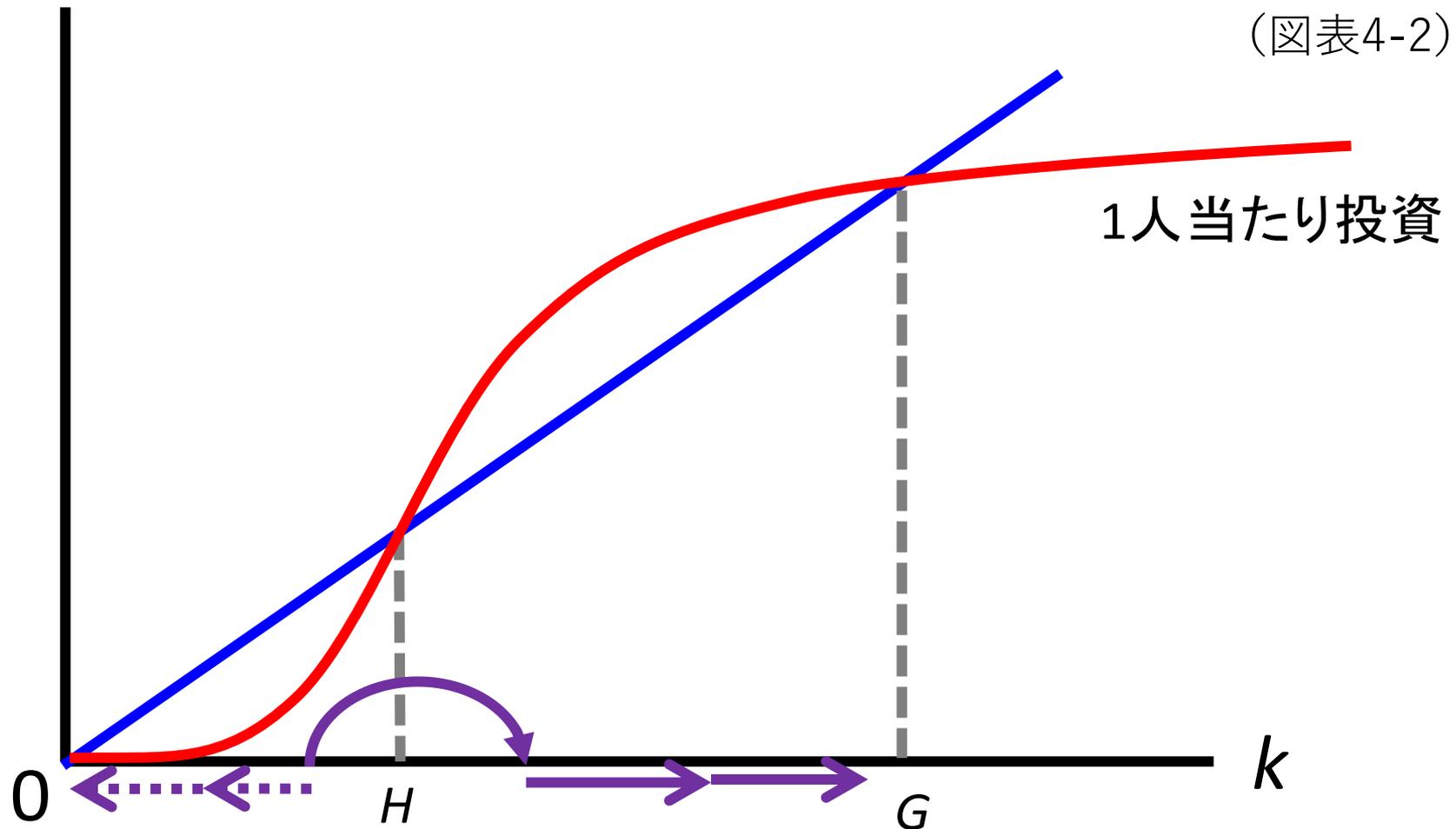
- 貧困の罍のモデルの均衡の特徴
 - **経路依存性** (History matters)
 - 初期条件によって均衡経路が決まる
 - ただし歴史的な出来事で「初期」条件が変化し、経路が変化することもある
 - 気候変動などで図表4-2のJからKに移動すれば、貧困の罍から抜け出せる

4.4 経路依存性と成長期待

- 貧困の罠のモデルの均衡の特徴
 - **成長期待** (Expectations matter)
 - 2番目のモデルで
国民が近代産業の発展を期待
 - ➔ 将来の高賃金を期待して近代産業に労働者が移動
 - ➔ 規模の経済で実際に生産性が上昇
 - ➔ 産業発展
(**自己充足的な予言**)

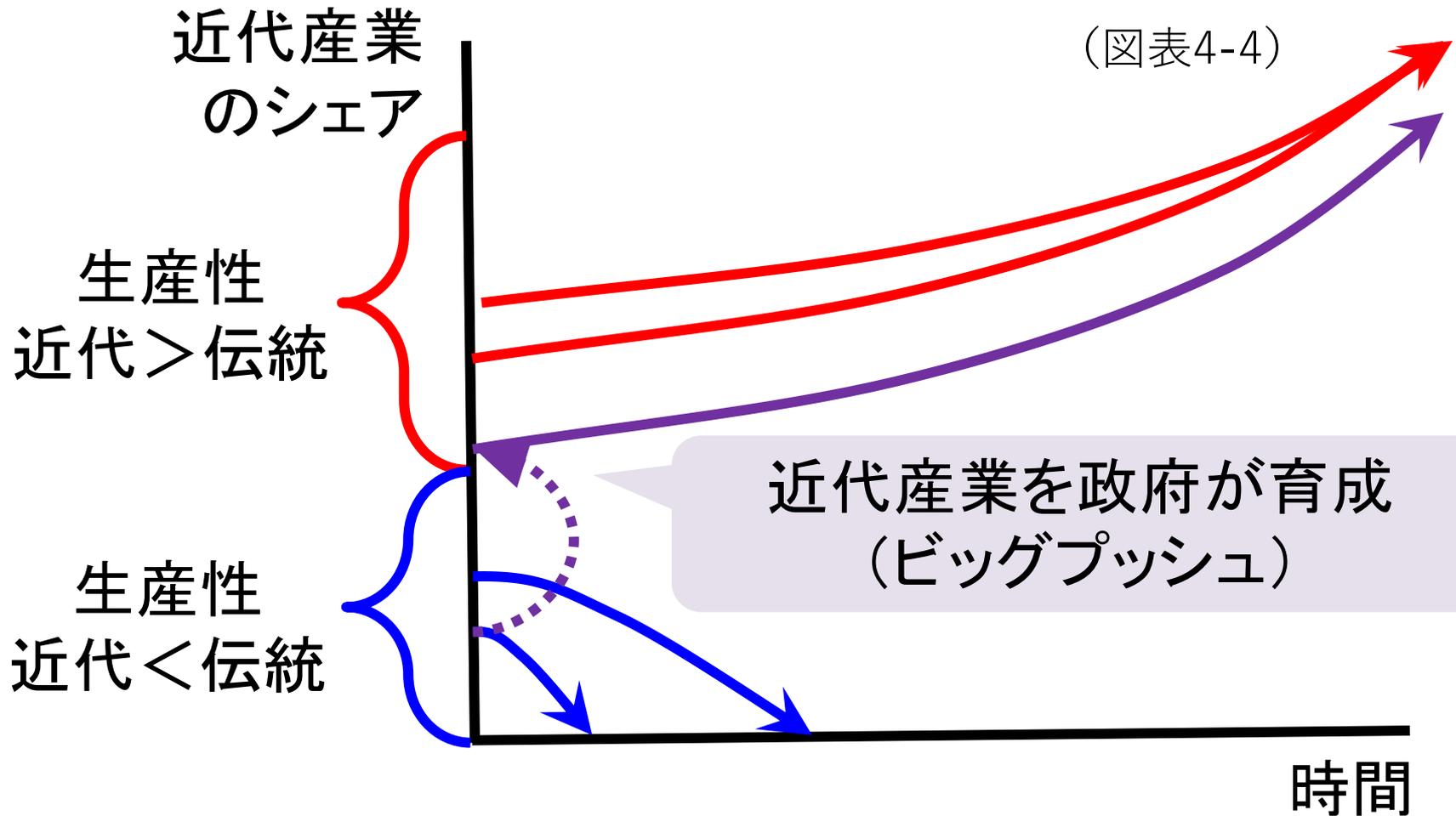
4.5 政策の効果

(図表4-2)



大規模の政策を一気に行うこと（**ビッグプッシュ**）が有効（ H を越えなければ政策は無効に）

政策的含意 (1)



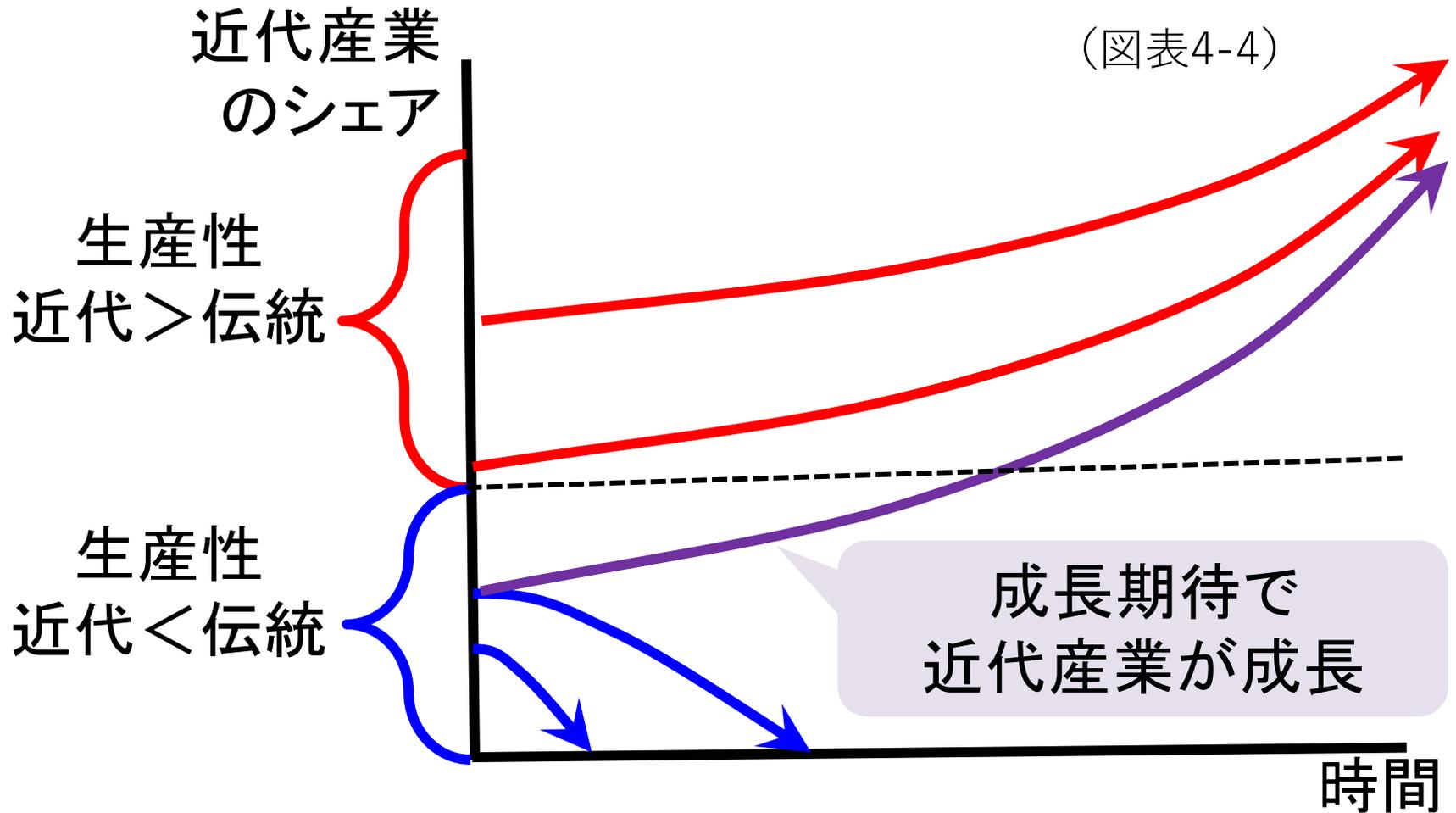
近代産業が小さく、生産性が低い

→ 政府が一気に近代産業を育成 (ビッグプッシュ)

→ 規模の経済で近代産業の生産性 ↑ → 産業発展

政策的含意 (2)

(図表4-4)



政府が将来近代産業が成長するという**期待を形成**

- ➔ 初期は近代産業の賃金が低いが、労働力が流入
- ➔ 最終的には規模の経済で実際に賃金上昇➔産業発展

「貧困の罨」のあるモデルの政策的含意

- 市場均衡では経済は罨にはまる場合がある
→ 罨から脱出するには**政府の介入が必要**
- **「ビッグプッシュ」政策**
 - 閾値を超えて、一気に資本ストック、近代産業を向上させる
- **政府による期待形成**
 - 1960年代日本の所得倍増計画
 - 中国政府による成長予測

4.6 政府の失敗

- ビッグプッシュ・成長期待形成の政策は、**実際の運用**で注意が必要
- 貧困の罨の理論が正しくても
 - 貧困の罨にはまっているかどうかを見極める力が政府にない
 - 「近代産業」（規模の経済が働く産業）を見極める力が政府にない
 - 腐敗のために近代産業に資金が回らない
- 貧困の罨の理論が間違っていれば
 - ビッグプッシュは財政負担が大きすぎる
 - 成長期待形成は無駄

4.7 貧困の罨はあるのか

- 第2-3章の標準的な成長理論とこの章の貧困の罨の理論とでは、どちらが途上国の**現実とより整合的か**？
- 最貧国の経済成長が停滞していることは、どちらの理論でも説明可能
 - 第2-3章の理論：**定常状態が低い**
(貯蓄率が低い、人口成長率が低い)
 - この章の理論：**貧困の罨**にはまっている
- 多くの国のデータで実証が必要

貧困の罫の理論モデル (3)

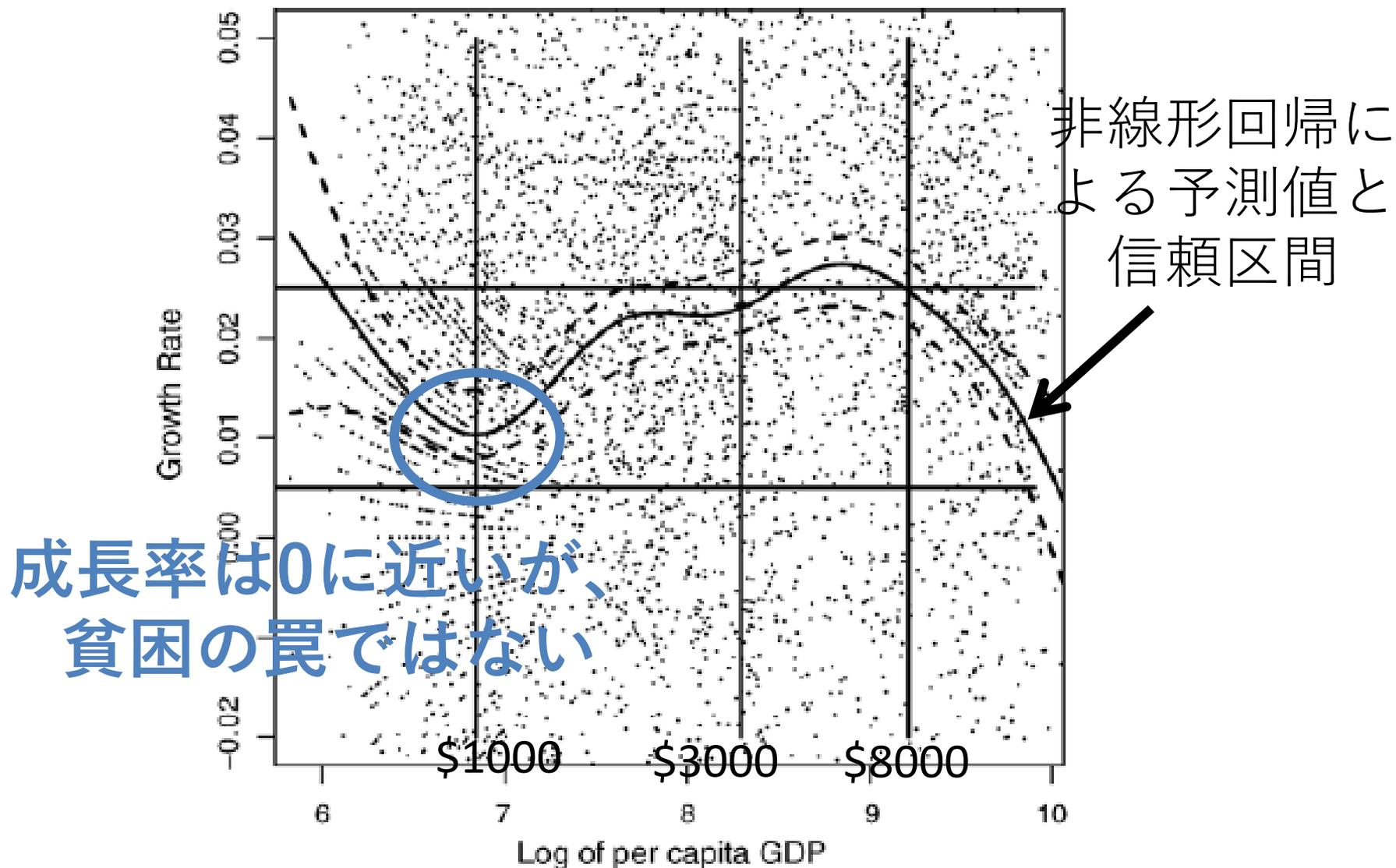
- 第3章の途上国モデルの仮定
 - 途上国と先進国の技術格差が大きいほど途上国の模倣は容易
- しかし、**技術格差が大きければ**むしろ学習が難しくなり、**模倣が困難**になる可能性もある
 - もしそうなら、最貧国は先進国との技術格差が大きすぎて、模倣が難しく貧困が定着
- 世界各国のデータを使った検証 (ベンハビブら)
 - 後者が正しく、**貧困の罫が存在**することが実証
 - ただし、平均的な**教育年数が2年以上**であれば模倣が可能で貧困の罫から抜け出せる

15歳以上の平均教育年数 (図表4-5)

	1960年	2010年
マリ	0.20	1.97
モザンビーク	0.82	1.93
ニジェール	0.38	1.88
リベリア	0.73	4.20
ベナン	0.61	4.43
中央アフリカ共和国	0.50	3.76
ガンビア	0.47	3.77
シエラレオーネ	0.50	4.23
スーダン	0.48	3.21
ネパール	0.13	4.23
日本	7.76	11.60
世界平均	3.46	8.34

最近は貧困の罨はほとんどの国で存在していない

各国の1人当たりGDPとその成長率 (図表4-6)



4.8 まとめ

- 貧困の罨の原因
 - 貧しいと貯蓄できないので投資もできない
 - 近代産業の規模が小さいと生産性が低く、近代産業への転換が進まない
- 貧困の罨が存在している場合には、ビッグプッシュや成長期待を醸成する政策が有効
- 貧困の罨は理論的な可能性としてはあるが、特に近年は実際にはほとんどの国で存在していない可能性が高い